

巡回日詩

0706

本日は

サラダ記念日

下は本日の日本経済新聞朝刊のコラムです。

本日の日付が、俵万智さんのサラダ記念日であることを紹介しています。

高校生の皆さんは、短歌というと百人一首のようなものを想像し、文法の学習とも相俟って、やや難解なイメージを持っているかもしれません。しかし俵さんのように話し言葉を使い、句の切れ目を逆に跨ったりした、素敵な現代短歌もあるのだとわかるかもしれません。

では、歌集『チョコレート革命』から二首紹介します。

クーラーの風に吹かれて鳴っている風鈴の音、君の寝返り
やさしすぎるキスなんかしてくれるから

あなたの嘘に気づいてしまう

2022. 7. 6

春秋

「あふれるように、という表現では
まだるっこしい。噴き出すように短歌
ができるようであった」。俵万智さん
のデビューを後押しした佐佐木幸綱さん
は、かの「サラダ記念日」の跋文に
こう記した。1987年刊。たびたび

読み返すが、噴き出す言葉の勢いは強烈だ。

▼表題作は、たぶん日本でいちばん有名な短歌
だろう。「『この味がいいね』と君が言ったか
ら七月六日はサラダ記念日」。毎年、きょう7
月6日が巡るとつい口に出してしまう。バブル
に突入する時代の、浮き立つような世の中を回
想する人も多いはずだ。「ナイターの風に吹か
れている君のグレープフルーツいろの横顔」

▼男女雇用機会均等法の施行前後だが、男た
ちは威張っていたようである。「『嫁さんになれ
よ』だなんてカンチューハイ二本で言っしま
っていいの」。いや、こういう物言いは転換期
のあがきだったのかもしれない。「『平凡な女
でいろよ』激辛のスナック菓子を食べながら聞
く」。昨今ならモラハラと責められようか。

▼80年代半ばごろの空気を濃密に感じさせなが
ら、表現は少しも古びていない。ニッポンがじ
わり衰退してきた歲月。そんな変化をくぐり抜
けた「三十一文字」の威力である。ふとページ
をめくれば「思い出はミックスベジタブルのよ
う けれど解凍してはいけない」。郷愁に浸る
のをたしなめられたようで、きくりとした。